東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　66: 181－197，2015.

# 2歳児のユーモア行動の表出と共有過程

栗　林　万　葉*・岩　立　京　子**

幼児教育学分野

（2014年9月30日受理）

## 1．問題と目的

幼児とかかわっていると，おかしな言葉を発しながら，おどけた動きをしたり，ウルトラマンや仮面ライダーなどの戦隊ヒーローや，キャラクター，お笑い芸人など，テレビに出ているものの真似をしたり，ブロックやハンカチなどで何かに見立てて遊んだりする姿がよく見られる。1人で楽しんでいることもあるが，他の幼児や保育者に，自分のおかしな行動を見せて，笑いなどの反応を得て，それによってさらに繰り返したり，それが幼児の中で広がっていったりすることもある。幼児自身が「面白い！」と感じたものが模倣されやすいものだと思われる。また幼児は，模倣するだけでなく，自分が楽しいと思っていることで，他者を笑わせよう，楽しませようとして，おどけたり，おかしな行動をしたりする姿も見られる。そこには，どのような特徴が見られるのだろうか。

「おどけ」や「おかしさ」を「ユーモア」ということがある。先に挙げたように，幼児を見ていると，おどけたり，おかしな言動をしたりする姿がよく見られ，ユーモアで溢れているように思われる。では，「ユーモア」とはどのようなものであり，幼児はどのように「ユーモア」を表出するのだろうか。

上野（1992）[1] は，ユーモアを遊戯的ユーモア，攻撃的ユーモア，支援的ユーモアの3つに分類することを提案している。上野（1993）[2] は，大学生等を対象にユーモアに対する態度，攻撃性と愛他性及びユーモア刺激の表出に関する質問項目からなる質問紙調査を行い，遊戯的ユーモア志向と攻撃的ユーモア志向が区別されることを明らかにしている。そのなかでも，遊戯的ユーモア志向は，愛他性と関連し，対人場面を和ませるユーモア刺激を表出する傾向と関連しており，笑いやユーモアによって他者を慰めたり，励ましたりする支援的な要因が含まれ，精神的成熟性を示すユーモア感覚と関連しているものと考えられた。このことから，ユーモアには対人関係を良好にしたり，ストレスを緩和したりする効果もあるのではないかと思われる。

上野（1993）[2] の研究やユーモアのストレス緩和などに関する研究は，成人に対するものが多いが，ユーモアは乳幼児期から芽生え，養われてくるものである。そこで，本研究では，幼児のユーモア行動の表出について明らかにすることを目的とする。

## 2．ユーモアについて

ユーモアとはどのようなものなのか。何をユーモアと捉えるのか。人によって様々であると思われる。ユーモアについての研究は古くから行われているが，そのほとんどで，ユーモアとは何かということについて検討している。そこで本研究でも，先行研究から，ユーモアとはどのようなものなのかについて，検討していく。

### 2．1　ユーモアの定義

McGhee（1979）[3] は，ユーモアを「知的な遊びの一形態」と定義した。McGhee（1979）[3] によると，そのような遊びには二つの形態が識別され，一つは相対的

＊　東京学芸大学大学院教育学研究科
＊＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

にまじめなものであり，既存の知識を拡大しようという強い欲求によって特徴づけられ，もう一つは，まじめな意図は欠如していて，あり得ないとか見込みがないとわかっている事象や関係を，空想のなかであれこれ考えて遊ぶという特徴をもつものであるという。幼児の姿を見ていると，真剣に何かを模倣しているものもあり，大人から見ると，そこに「面白さ」を感じるが，その幼児は「ユーモア」だと思ってやっているわけではないため，まじめなものは「ユーモア」ではなく，後者の空想的な遊びが「ユーモア」であると思われる。McGhee（1979）[3] も，小さな子どものユーモアの本質は，このような空想的な不適合性について，まじめにではなく遊びのように解釈することにあると述べており，まじめなものは「ユーモア」とは捉えられないとしても良いと思われる。また，ユーモアは認知的な経験であり，それは背景にある生理学的な変化と，それに連合した顕在的な行動反応（微笑と笑い）が特徴であるということから，「ユーモア」には他者からの反応があるものであることが考えられる。

次に平井（1985）[4] は，ユーモアそのものについての定義はしていないが，ユーモアへと発達する出発点として，4歳前後から顕著に現れてくる「おどけ・ふざけ」に着目している。その結果として，おどけ・ふざけに共通して，それらを表現した子どもが楽しさを感じており，その楽しさを他の子どもや大人と共有しようと期待していること，おどけ・ふざけには，活動や友だちとの関係をさらに発展させようと意識している場合と，活動に熱中できないための退屈さを紛らわそうとしたり，緊張から解放されたいと思ったりする意識による場合が存在することなどがあると述べている。

それから奥田（1987）[5] では，アメリカを中心に行われてきた子供のユーモアに関する研究を調べてきた中で，ユーモアが広く柔軟に使われているが，おかしさを表す概念としてほぼ示されているようであることから，「おかしさ」，「おかしさを楽しむ心」として仮説を立て，研究過程の中で，定義に肉づけしていくと述べているが，結果として，定義づけるのは非常に難しいと述べており，肉づけはされていない。奥田（1988）[6] でも，子供のユーモアの研究をしているが，そこでも「おかしさ」，「おかしさを楽しむ心」の仮説のまま研究をしている。

田爪（1996）[7] は，我々の，「おかしさ，おもしろさ」という心的現象をユーモア（humor）といい，多くの場合，笑いという表出行動を伴うということは述べているが，ユーモアそのものについての検討はしていない。

以上より，McGhee（1979）[3] 以外の研究では，ユーモアの定義はされておらず，研究結果として，ユーモアがどのように発達していくのか，ユーモアとはどのような特徴をもっているのかなどを考察していた。このことから，ユーモアの定義づけの難しさを感じた。そこで本研究では，「おどけ」「おかしさ」「面白さ」「笑い」をキーワードにユーモアを捉え，McGhee（1979）[3] の，「知的な遊びの一形態」というユーモアの定義は参考として検討していきたい。

### ２．２　ユーモアの発達過程

ユーモアの発達過程について，最初に遊びとユーモアの関連性について取り扱ったと言われている，Freud（1960）[8] は，遊びの中でのユーモアの発達の3段階を特徴づけており，初めは「遊び」と呼ばれる段階（2－3歳）で，それに「おどけ」（4－6歳）が続き，最後に真の「ジョーキング」（およそ7歳）が発達する。「遊び」の段階を，音声の繰り返し，対象物に不一致な行為をわざと実践すること，そして馴染みのものを不一致なやり方で扱うことによって「それを再発見すること」を含むものとして特徴づけている。

また，McGhee（1979）[3] は，認知過程としてのユーモアの4段階を定義した。第一段階は「不一致な（ずれた）行為」（1－2歳），第二段階は「不一致な言葉」（2歳頃から），第三段階は「概念的な不一致」（4歳頃から），そして第四段階の「言葉遊び／多義性」（7歳頃）である。

友定（1992）[9] は，1歳児から2歳児への笑いの発達を研究しており，そこから，1歳児の段階では笑いは主に外界をとらえ受けとめることに使用されていたが，2歳児になって笑いを他者との関係で能動的に使用することができるようになってきたこと，2歳児になって「わかる」ことに関する笑いが非常に多く観察され，「ズレ」もある程度理解できるようになり「おかしさ」がわかるようになってきたことが結果として述べられている。この研究の中で，「ズレ」「おかしさ」という言葉があることから，「笑い」と「ユーモア」との結びつきも強いと思われる。

これらの発達段階を見てみると，ユーモアは2歳頃から表れると考えられる。2歳児は言葉での他者とのやりとりも活発になり，自己主張も増えてきて，知的な発達をしていく時期でもあるため，2歳児を対象にすることで，ユーモアの芽生えや発達の大きな変化を見ていけるのでないだろうか。

Freud（1960）[8]，McGhee（1979）[3]，友定（1992）[9]

のユーモアや笑いの発達段階の中に,「不一致（ズレ）」という言葉が出てくる。その理由は，子どもたちが大人や仲間のリアクションを得るユーモアを創造するために様々な行為，言葉，コンセプト，意味を慎重に使い遊ぶことができるためには，それらを正確に「知って」いなければならないからである[10]。ユーモアと思われる行為が，現実とずれていることを理解しているからこそ，それを「おかしい」と思えるのである。しかし，ただ単に「不一致」であることがユーモアにつながるのだろうか。そこには，意図的に相手を笑わせようとする意識が必要であり，相手がどのようなものを面白いと感じるかを考えることは情動理解能力を要すると思われる。このことと，様々なことを理解していなければ，ユーモアを創造することができないことを考えると，ユーモアを表出するには，知的な発達が伴っていなければならないと思われる。先に挙げた，McGhee（1979）[3] による，「知的な遊びの一形態」というユーモアの定義は当てはまるのではないか。

## ３．共有過程について

これまで，ユーモアそのものについて検討してきたが，ユーモアが成立するには，他者とのかかわりが必要であることについて，あまり触れてこなかった。Freud（1960）[8] やMcGhee（1979）[3] の発達段階を見ると，ユーモアは他者からの反応を得ようとしている行動であることが分かり，McGhee（1979）[3] は，ほかの人とユーモアを共有したいという願望をたいていの子どもが（大人と同じように）もっており，あり得ないあるいはばかげたごっこ遊びの創作演技は，一人でもおもしろく経験されるであろうが，楽しさはそれを共有することで増大すると述べている。また平井（1985）[4] の結果より，おどけ・ふざけを表現した子どもが楽しさを他の子どもや大人と共有しようと期待しているとあり，田爪（1996）[7] では，幼児のユーモア発言には単に相手を笑わせようとして表出されるのではなく，自分が面白いと思ったことを相手に伝えることによって相手を笑わせようとしているという傾向があると述べている。

宇惠（2007）[11] のユーモア測定尺度の因子に「ユーモアのコーピング利用」とあり，この項目には，「緊張した状況におかれると，何かおもしろいことは無いかと探してしまいます。」「問題に直面しても，その中におもしろさを見つけようとすれば楽になることがあります。」などがある。これらは，困難な状況にいるときに，自分の中でユーモアを感じて，心を落ち着かせるということであり，これらが活用されるには，自分の行為や思考が「おかしな」ものであることを，初めから認知している必要があるため，知的な発達が必要であると思われる。しかし，本研究では２歳児クラスの幼児を対象にしているため，そのような場面に遭遇することは考えられにくい。また２歳児の特徴としても，他者とのかかわりが増え，他者とかかわりたいと思う時期であることから，ユーモアは他者との相互作用の中で成立するものであると思われる。そのときの他者の反応は，ユーモア表出児のその後の他者とのかかわりにも大きな影響を与えるのではないか。そこで，他者の反応が見られたときを“共有された”と捉え，どのような共有過程が見られるかについても検討していく。

以上のことから，本研究では，２歳児のユーモア行動の表出とその共有過程を分析していく。

## ４．研究方法

### ４．１　観察協力園

東京都Ｋ市内の公立保育園

２歳児クラス12名（男児（B）８名，女児（G）４名）

G1：4月，B1：5月，B2：5月，B3：6月，B4：7月，G2：8月
B5：9月，G3：10月，G4：11月，B6：2月，B7：2月，B8：2月

担任：Ａ先生，Ｍ先生　フリーの保育者が入ることもある。

### ４．２　観察期間

2013年５月から11月の間，週に１回程度（全24回）

### ４．３　手続き

保育園の自由遊び場面（9:00 ～ 10:30）に参与観察を行う。

※途中，朝の挨拶，おやつ，排泄などを挟む。

幼児がユーモア行動を表出したものを記録し，事例としてまとめた。

### ４．４　幼児のユーモア行動の分類カテゴリーについて

幼児の行動がユーモアであるかどうか，観察者の主観的な判断によるものとならないために，奥田（1988）[6]，田爪（1996）[7] のユーモアカテゴリーを参考にする。田爪（1996）[7] のユーモアカテゴリーは，ユーモア発言に着目したものであったため，そこに奥田（1988）[6] の「行動によるユーモア」の項目も含ま

せ，さらに筆者の観察データをもとに作成された。そのカテゴリーと内容は以下の通りである。

表1　幼児のユーモア行動の分類カテゴリーとその内容

| |
|---|
| a) 不一致やナンセンスによるもの;表出された言動が現実とは異なっていたり，相手がナンセンスだと感じるような言動。 |
| b) おかしく言葉を発する;言葉の内容よりも，その言い方，フレーズやリズム等を面白くしたもの。 |
| c) おどけた恰好をする;面白い表情をしたり，おかしな動きをしたりするもの。 |
| d) 排泄や性に関すること;排泄物や性（性器）に関する言葉など，一般的に成人の間でタブーとされているもの。 |
| e) 相手の行動や身体的特徴; 相手の行動や身体的特徴を形容した表現。 |
| f) テレビや成人の言い方の真似;テレビ番組やコマーシャルで使われる言葉や動き，成人の口調を真似するもの。 |
| g) 言葉のもじり;文字や相手の言葉などの語呂をもじったもの，引っかけ言葉など，軽い言葉遊び。 |
| h) 相手の真似;相手の行動や言い方などをそのまま相手に返すもの。 |
| i) 相手の疑問や言い分に対する答え;相手との場面を解決しようとして用いる自分なりの理論や，相手の質問に対する答や言い訳。 |

以上の分類カテゴリーを参考にし，幼児がおどけたり，おかしな言動をしたり，他者からの反応を得ようとしたりしている姿を記録する。

## 5．結果と考察

全24回の観察で，全107事例，抽出された。ユーモアについて，分類カテゴリーをもとに新たなカテゴリー作成や分類を試みたところ，幼児のユーモア行動は，言葉と動きが伴っているものや不一致であり，おどけでもあるものなど，重複するものが多く，それが2歳児の特徴の一つであると考えられた。そこで今回はカテゴリーには分類せず，記録から見られたユーモアの特徴について分析する。そして，幼児間の違い，また特徴として見られた，無意図的なものや偶然表れたと思われるものに関して，共有については，共有相手や共有方法に関する視点から，2歳児のユーモア行動がどのようなものであるかを捉えていくこととした。

### 5．1　ユーモアの特徴分析

記録より，「不一致」，「見立て」，「おかしく言葉を発する」，「おどけた恰好をする」，「おかしく言葉を発し，さらにおどけた恰好が伴っているもの」，「排泄や性に関すること」，「テレビや成人の真似」，「言葉のもじり」，「反対言葉」，「相手に触れる」，「相手をおどかす」などが挙げられると思われた。これらについて，事例と共に分析していく。

（ユーモア行動＿＿＿，共有＿＿＿，影響されたユーモア行動＿＿＿）

「不一致」

| 事例103　2013年11月21日（木）〈B4くんだよ！〉 |
|---|
| 片付けの時間，B1が私の背中にくっついてきたので，「B1ちゃん，なに？」と尋ねると，「B1ちゃんじゃないよ，B4くんだよ！」と言ってきた。私が「えー！B4くんなの？B4くん，自分のこと，B4くんって言うんだっけ？」と笑いながら疑うと，横から笑いながら覗いてきた。 |

私の背中にくっついているのは，B1であるのにもかかわらず，B1本人が，「B4くんだよ！」と言っていることが，現実とは違うという意味での「不一致」である。この「不一致」は意図的に行われているものであり，相手にも「面白さ」が伝わると認識して表れているものであると思われる。

「見立て」

| 事例9　2013年6月6日（木）〈おにだぞー〉 |
|---|
| B1とB4は私のところに，ブロックの剣を持ってやってきた。B4が剣を私の頭に乗せて，「おにだぞー」と笑いながら言うと，B1も「おにだぞー」と自分の剣を私の頭に笑いながら乗せてきた。私が，B1に「（B1も）鬼なの？」と聞くと，B1は私の頭に乗せていた剣を，自分の頭に乗せて，「おにだぞー」とおどけた様子で言った。すると，B4も剣を自分の頭に乗せて「おにだぞー」とおどけて言うと，2人でM先生のところへ行った。その後，近くで見ていたG1も，「おにだぞー」「つのだぞー」「つのおにだぞー」と笑いながら言い，持っていたブロックを私の頭に乗せてきた。また，B5はフライパンにホットケーキを入れて遊んでいたが，手に持っていたブロックを頭に乗せて，「おにだぞー！」とおどけた様子で言って保育室を回っていた。 |

「おにだぞー」という言葉については，「相手をおど

かす」というところに当てはまるが，ブロックで作った剣を鬼の角に見立てていることも，ユーモア行動の1つであり，「相手をおどかす」ためにも必要なことであると考えられる。共有しているG1もブロックは持っており，別の遊びをしていたB5も，手にはフライパンもあったにもかかわらず，ブロックを頭の上に乗せていることから，ブロックで鬼の角を見立てることは，ここでの幼児たちにとって重要なことであると思われる。

「おかしく言葉を発する」

| 事例73　2013年10月11日（金）〈なんだってー！？〉 |
|---|
| G3がテーブルの上におぼんを乗せて，そこには，ご飯（ドーナッツ型に砂が入っているもの）が3つ並んでいた。それを見たB1は，「これ，ドーナッツなんじゃん！」と指さして笑い，それに対して，G3も笑うと，B1は急に「なんだってー！？」と声を上ずらせながら，G3を指さして笑った。B5もB1の後に，「なんだってー！？」と繰り返していた。それに対して，G3は笑顔ではあったが，聞いていないようでもあり，B1が使っていたしゃもじを無断で取ろうとし，B1に「ダメ！」と言われ，取り返された。 |

B1の「なんだってー！？」という言葉が，声を上ずらせていることや，笑いを伴っていることから，おかしく言葉を発しているものであると捉えた。B1の言葉が「面白い」と思われたことから，それを言われたG3は笑い，B5は模倣したのだと思われる。

「おどけた恰好をする」

| 事例54　2013年8月21日（水）〈ヒヨコ口〉 |
|---|
| G1は，私の方を向きながら，目を閉じて，完全に開かないように目を開けようとしたり（薄目），口をヒヨコのくちばしのように，縦長にして，唇を上下に動かしたりとおどけていた。近くにいたB1は，それを見て，のどを「あ゛ーー」と鳴らしたり，ヒヨコの口を真似していた。（私は微笑んで見ていた。） |

G1の行動は，非日常的なものであり，意図的に薄目にしたり，ヒヨコのような口を作ったりしていることからも，おどけていると思われる。

「おかしく言葉を発し，さらにおどけた恰好が伴っているもの」

| 事例53　2013年8月21日（水）〈ららぷ〜〉 |
|---|
| G1は私を見て，小さなカバン（のおもちゃ）を耳に当てながら，「ららぷ〜（“ぷ〜”で声が高くなり，顔も斜め上に上げる）」と言い，おどけていた。これを何度も繰り返していた。（私は笑って見ていた。）B5がG1の姿を見て，笑いながら「またして」と言うと，G1は「ららぷ〜」とし，B5は笑い，再び「またして」と言うと，G1は「ららぷ〜」と繰り返していた。 |

「ららぷ〜」という言葉自体も，語尾で声を高くしているため，おかしな言葉であり，ナンセンスな言葉でもあると思われるが，そこに顔も斜め上に上げるという動きが伴ってくることで，さらに「おかしさ」が増したのだと思われる。

「排泄や性に関すること」

| 事例2　2013年5月24日（金）〈おっぱい〉 |
|---|
| B2はおままごとコーナーでA先生の膝の上に座っていた。B2が自分の胸を触っていたのか，A先生はB2に「B2くん，おっぱい触ってたのー？」と聞き，笑うと，近くにいたB1がTシャツをめくりお腹を出し，「おっぱい」と言って，笑って見せていた。すると，G2もB6も同じように，Tシャツをめくり，お腹を出して，「おっぱい」「おっぱい」と言って，お互いに見せ合ったり，先生に見せたりして，笑っていた。B6は保育室内をその状態でぐるぐる回っていた。A先生は，「えー。恥ずかしいー。」と言って笑っていた。 |

「おっぱい」という言葉が一般的にタブーとされている言葉であるが，それを幼児は「面白いもの」として使っている。B1の行動の前に，保育者が笑っていることからも，クラスとして幼児の中に，「おっぱい」という言葉が「面白いもの」として浸透していると思われる。そのことから，B1の行動に対して，G2,B6も模倣していたと考えられる。

「テレビや成人の真似」

| 事例28　2013年7月4日（木）〈テレビに出ている人の真似2〉 |
|---|
| G1，B1はブロック遊びをしている。G1が突然「いまでしょ！」と，両手を某塾講師のようなポーズをつけて言い，笑っていた。すると，B1は再び「あたりまえ！」と言って，あたりまえ体操を始めた。G1もB1の後をついて行き，「みぎあしだすとー…あるける！」と言って楽しんでいた。そこで盛り上がっていると，少し離れたところで，B3が再び，ゴールデンボンバーの曲を飛び跳ねながら一人で歌っていた。そしてそこにB7も「わーわー」と言いながら，飛び跳ねて入ってきた。 |

| 事例52　2013年８月７日（水）〈ありがとうございますー〉 |
|---|
| B6は何か喋った後に，「ありがとーございますー」と言うと，M先生が，「なにそれー」と大笑いしたことから，片手をバケツに突っ込んで，「ありがとーございますー」「ありがとーございますー」「ありがとーございますー」と笑いながら繰り返した。そして，バケツの中の水をたらいに入れ，そのバケツもたらいに入れた。他のバケツも持ってきて，「ありがとーございましたー」と言うと，その中の水をたらいに入れてから，バケツも入れて去った。 |

事例28は，「テレビに出ている人の真似」，事例52は，「成人の話し方の真似」である。事例28の方は，幼児の中で「面白いもの」「楽しいもの」として認識されていたものであると思われる。事例52は，B6は初めは意図的ではなかったが，保育者が笑うという反応をしたことから，それ以降は意識をして発していたと思われる。しかし，周りの他者に向かって表出しているのではなく，自分自身の中で楽しんでいるようにも思われた。

「言葉のもじり」

| 事例79　2013年10月18日（金）〈ニョロゲッティ〉 |
|---|
| お散歩の帰り道，M先生が「今日（のお昼ご飯）はスパゲッティだよー！」と言っていた。すると，G1は「ニョロニョロー」と言って笑い，「ニョロゲッティ」と笑いながら言うと，隣のG4も「ニョロゲッティ」と言って笑った。その後，G1は「のびゲッティ！」と繰り返して笑い，G4も「のびゲッティ！」と言って笑い合っていた。「スパケーキ」とも言っていた。 |

言葉のもじりは，G1やB1の間くらいでしか表れなかった。このことから，言葉の発達が進んでいるであろう，月齢の高い幼児の方が，表れることが多いと思われる。ここでは，保育者が昼食を言い，そこから連想して出てきた言葉とその昼食の名前とを組み合わせている。

「反対言葉」

| 事例24　2013年６月26日（水）〈先生はイスだよー〉 |
|---|
| G1とG4が私の膝の上から立ち上がる気配がなかったので，「先生，いすじゃないんですけどー」と言うと，G1は「せんせーはイスだよ～」と笑った。それに対して私は「えー」と笑いながら言った。 |

これは，現実とは違うことを認識しているが，反対の言葉を発していることから，反対言葉として捉えた。現実と違うということから，「不一致」にも当てはまるとも思われる。観察者の言葉に対して，現実とは違う言葉で応答することは，言語能力の高さが必要であり，知的な発達が進んでいるからこそ表れるものだと考えられる。基本的に２歳児では，言葉だけというものは少なく，行動も伴っているのだが，言葉だけでのユーモアも見ることができたことから，ユーモア発言の芽生えも捉えることができると思われる。

「相手に触れる」

| 事例48　2013年８月７日（水）〈こしょこしょ〉 |
|---|
| B1は私の膝の上に頭を乗せて，寝そべる。すると，B4が「おきろー」とB1の首に手を当てて，笑いながらくすぐる。B1はくすぐったそうに笑う。一度終わり，B1も私の膝からいなくなった。再び，B1が寝そべりに来て，「B4ちゃん，こしょこしょしてー」と言うが，B4は近くにいなかったため，気づいてもらえなかった。しかしすぐに，B4はB1が私の膝のところにいることに気づき，突進してB1にぶつかると，B1が持っていたブロックが壊れてしまったが，B1はそれを笑いながら修復した。 |

「相手に触れる」というものは，非日常的な行為であり，相手に直接触れることは，その相手に反応を得ようとしていることであるため，そこに笑いが伴えば，ユーモアとも捉えられると思われる。ここでは，相手をくすぐることで，相手を笑わせようとしていると思われるため，ユーモア行動であると考えた。

「相手をおどかす」

| 事例75　2013年10月18日（金）〈おばけだぞー〉 |
|---|
| G3はG4とB6に対して，突然，「おーばーけーだーぞー！」と低い声で言って，手を前に出しておばけのふりをして，笑いながら２人を追いかけようとすると，G4とB6は「きゃー！」と叫んで，笑いながら逃げた。G3は２人を「まてまてー！」と低い声で言って追いかけた。 |

「相手をおどかす」ということがユーモアであるかについて，ここでの「おどかす」は，相手を本当に怖がらせようとしているのではなく，遊びの文脈の中で表出されていることから，「面白さ」も伴っていると思われる。また，「おどかす」だけではなく，事例75では，「おーばーけーだーぞー」という言葉の発し方が，「おかしく言葉を発する」に当てはまり，手を前に出しておばけのふりをしていることから，「おどけた恰好」に当てはまると思われる。このことから，ただ「おどかす」のではなく，ユーモア行動につながるものも伴っている。

### ５．２　幼児間の違い

ここでは，幼児間の違いを見ていき，ユーモア行動の特徴を捉えていく。

表２　各幼児のユーモア表出数・共有数

| | ユーモア表出数 {特定の他者へのもの（保育者)} | 共有数 | 欠席数 |
|---|---|---|---|
| G1 | 35 {28(25)} | 20 | 2 |
| B1 | 23 {12( 6 )} | 19 | 1 |
| B2 | 3 { 3 ( 2 )} | 0 | 1 |
| B3 | 8 { 1 ( 0 )} | 3 | 2 |
| B4 | 23 {20(14)} | 11 | 1 |
| G2 | 18 {17(17)} | 9 | 4 |
| B5 | 0 | 7 | 3 |
| G3 | 6 { 5 ( 3 )} | 4 | 3 |
| G4 | 1 { 1 ( 0 )} | 9 | 5 |
| B6 | 12 { 8 ( 6 )} | 7 | 4 |
| B7 | 2 { 2 ( 2 )} | 6 | 2 |
| B8 | 1 { 1 ( 0 )} | 3 | 3 |

この表より，月齢の高い幼児の方が，ユーモアの表出数が多く，共有数も多い傾向があることが分かる。しかし，月齢の高いB2は表出数が極端に少なく，共有数に関しては見られていない。一方で，月齢の低いB6はG2に続き，表出数や共有数が多く見られている。このことから，月齢の高さだけではなく，他にも要因が考えられる。そこで，表より，ユーモア表出が誰に向けられたものなのかということから，幼児の他者とのかかわり方などを検討していく。

最もユーモア表出数，共有数が多かったG1は，半分以上は保育者に対してのものであり，その保育者とは観察者の私であることが多かった。残りは，不特定多数のものや，無意図的なものであるが，それらも私の近くで表出されることが多かった。そのため，事例数も多くなったのではないかと思われる。しかし，ユーモア表出数だけでなく，共有数も多いことから，私とだけのかかわりが多いというわけではなく，他の幼児とのかかわりも多いことが考えられる。自分が面白いと思ったものを，自分だけで楽しむのではなく，他者と共有したいという思いが強いのだと思われる。保育者に対するユーモア表出数の多かった，B4やG2についても，共有数が比較的多いことから，他の幼児とのかかわりもあることが分かる。特に，B4はユーモア表出数で他の幼児に対するものも多いことから，自分から他の幼児とかかわることも多いと思われる。一方でG2は，表出数のほとんどが保育者に向けられたものであり，その保育者とは観察者の私であることが多い。共有数も比較的多いことから，他の幼児とのかかわりがないというわけではないと思われるが，自分が「面白い」と思っていることを見てほしい人，共有したい人は，観察者や保育者であるのだろう。これは，G2が観察者や保育者に安定感を抱いているからであり，感情の共有をしやすいと思っているからだと思われる。また，保育者や観察者などの大人の方が，幼児の行動を解釈してもらえるため，その大人によってG2のユーモアが支えられているのだとすれば，G2の他者とのかかわりに未熟さも見られると思われる。

ユーモアの表出数が多いが，特定の他者に向けたものが少ないB1は，半分は不特定多数の他者に向けられたものになっている。B1は，遊びの様子から，好奇心が旺盛で，あらゆることに興味があるように思われる。一人で遊んでいることもあるが，G1やB4を誘って一緒に遊ぶことも多い。一人で遊んでいる頃は，独り言のように，歌を歌っていることもあり，それが次第に全体に向けられるものになったのではないかと思われる。そのため，自分がやっていることも，多くの人に見てもらいたいという思いもあり，不特定多数の他者への表出が多かったのではないかと考えられる。

月齢は低いがユーモアの表出数や共有数が多かったB6は，１歳児クラスにいる頃から，他の幼児とのかかわりをもとうとすることが多く，２歳児クラスに上がってからも，他の幼児に働きかけることが多く見られた。しかし，反応されないことが多かった。遊びの様子を見ていると，B6が「いーれーて」と中に入ろうとすると，B1が中に入れなかったり，お店屋さんをやっているときは，B6もお店屋さんをやりたかったのだが，「B6ちゃんは，お客さんね。」と言われてしまったりすることもあった。保育者との話では，B1はB6を下に見ているのではないかということであった。確かに，B6は体もクラスで一番小さいことから，「赤ちゃん」のように見られているようにも思われる。最近では，G3,G4の月齢の近い幼児とのかかわりが多く見られるようになり，そこでB6のユーモア行動が受け止められている様子だった。

月齢は高いが，ユーモア表出数が少なかったB2について，普段のB2の様子は，一人で遊んでいることや保育者のそばにいることが多い。保育室での遊びでは，電車やブロック，ままごとなど，一人で遊べるものなのだが，園庭で遊ぶときは，保育者の援助がなければ，一人でただ座っていることもよく見られた。B2の事例は，２つは無意図的なものであり，それら

は保育者の反応によって，意識的に表出していたものであった。もう１つは，特定の幼児に向かって表出したものである。無意図的なものがあったということから，他者によって反応があれば，さらにユーモア行動として意識的に表出するものが他にもあった可能性も考えられる。近くにいる保育者がB2の様子を見て，「面白い」と思ったことを共有するということをしていれば，B2自身のユーモア表出場面も増えたのかもしれない。10月下旬頃から，B7と２人で楽しさを共有している姿は見られていた。このことから，他児とのかかわりも徐々に増えてきており，他の幼児との共有場面も増えてくることも考えられる。保育者との話では，B2はマイペースであり，周りについていこうとしないそうだ。（実際に，他の幼児が先に準備を終えていても，B2はその前の段階にいることはよく見られた。）そういった性格もあり，他者との共有する場面も一度も見られなかったのだと思われる。

表を見ていると，B5,G4,B7,B8はユーモア表出も全体的に少なく，共有数の方が多い傾向にあることが分かる。特にB5,G4はユーモア表出数と共有数に大きな差が見られる。B5はこの４人の中では，一番月齢は高いが，ユーモア行動は一度も見られなかった。遊びの様子を見ていると，一人でも遊んでいるが，他の幼児の模倣をする姿の方がよく見られた。共有しているものの多くが，他の遊びをしているが，その遊びを一度止めて，ユーモア表出児の模倣をするというものである。しかし，模倣をして共有していても，ユーモア表出児や他の共有児，共有者には届いていないことも多かった。このことから，他の幼児の動きに興味をもっていると考えられるが，そこに上手く参加できないのではないかと思われる。遊びの中で他の幼児と対立してしまう場面も多くなってきているため，その経験を通して，他者とのかかわり方を学んでいる過程にいるのではないかと思われる。

また，月齢が比較的低い，G3,G4,B7,B8はユーモア表出数は少ないが，そのほとんど，あるいは全てが，特定の他者に向けられたものである。これは，特定の他者との関係性の深さ，安心感から表出されたのだと思われるが，個人に向けるものと全体に向けるものとでは，全体に向けるものの方が他者とのかかわりが発達しているということも考えられる。一人遊びが多く，徐々に他者とも一緒に遊ぶ様子が見られてきている段階であることも関係しているだろう。これは，ユーモア表出数が少なく，その全てが特定の他者に向けたものである，B2にも当てはまると思われる。

一方で，不特定多数の他者への表出を多くしている幼児は，G1,B1,B3,B4であり，月齢が高かったり，ユーモア表出数が多かったりする幼児である。また，月齢は低いがB6も不特定多数の他者に向けての表出は比較的よく見られている。このことから，不特定多数の他者に向けてのユーモアの表出をしている幼児の方が，他者とのかかわりが発達していると考えられる。

これらのことから，共有数が多い幼児は，他者とのかかわりの多さと関係していると思われるが，ユーモア表出数は，他者とのかかわりの多さだけでなく，かかわり方や関係性，さらに要因の１つとしては，個人の性格の違いも関係していると思われる。

### ５．３　無意図的なもの，偶然なもの

ユーモア行動の表出には，もともと表出児にあたる幼児は，意識をしていた行動ではなかったが，近くにいた他児や保育者からの反応によって，自分の行動を意識的に繰り返すものや，やりとりの中で偶然起こったことが，お互いの中で「面白いこと」として共有され，繰り返すものもあった。これらは，ユーモアの芽生えを捉える上で重要になってくると思われるため，事例とともに分析していく。

「無意図的なもの」

| 事例５　2013年５月29日（水）〈ブブンブブンブンブーン〉 |
|---|
| G1とB1はおもちゃの電車を持って，ブロックのプレートの上に隣同士で前後に滑らせていた。G1が「ブブンブブンブンブーン」と歌い始めると，B1も「ブブンブブンブンブーン」と笑いながら滑らせていた。そしてお互い顔を見合せて，笑いながら「ブブンブブンブンブーン」と歌いながら，電車を滑らせていた。その後，B1はいなくなったが，G1は「ルルンルルンルンルーン」と歌いながら，床の上で滑らせていた。 |

B1がG1の「ブブンブブンブンブーン」を模倣したことで，G1も意識して歌っていると思われる。G1とB1は電車を持って，同じ動きをしていたことも，共有につながっていると思われる。

無意図的なものは，他者によって反応され，そこで意識的に繰り返すようになるものが特徴としてあると思われる。そのため，他者によって反応されなければ，特に意味をもたない行動になることが考えられる。

次に「偶然なもの」についても検討する。

「偶然なもの」

| 事例50　2013年8月7日（水）〈頭突き〉 |
|---|
| B4が床に座り，B1が立ったときに，B1がB4をまたぐようになった。それが楽しかったのか，B4はB1の股に頭突きをすると，B1は「いや～」と笑いながら遠ざかった。B1はまたB4に近づき，「やって」「もっかいやって」と言うと，B4がB1の股に頭突きをし，B1が「いや～」と遠ざかるやりとりを繰り返した。 |

| 事例90　2013年11月14日（木）〈スパゲッティをあごに当てる〉 |
|---|
| G1が私にままごとセットのスパゲッティを食べさせようとしていると，顔に近づけたスパゲッティが私のあごに当たった。それが面白かったのか，G1は「アハハハハハ」と笑い，意図的にスパゲッティを私のあごにつけ，私はそれに対して，「あれれ？」などと微笑みながら反応した。それを近くにいたG2が笑う。 |

偶然，普段では考えられない部分が触れ合い，触れ合ったもの同士が「おかしさ」を共有したことで，繰り返していることである。事例50では，B4の頭とB1の股が当たり，事例90では口に入れようとしたスパゲッティがあごに当たった。これは，非日常的なことであると思われる。事例90では共有相手も私であったため，G1が「面白い！」と思えば，繰り返された。そこには，私であれば受け止めてもらえるという安心感もあると思われる。一方で，事例50は，触れ合ったもの同士が，B1とB4であるため，どちらかがそれに「面白さ」を感じなければ，繰り返されることもない。つまり，双方の感情共有が必要であると思われる。他者による反応がなければ，ユーモア行動としては成立しない。

阿部（1999）[12]は，偶然をくり返して，笑い合うことの快さや楽しさを経験していくと，子どもたちは今度はその笑いを自分たちでつくりだそうとすると述べている。つまり，ここでの，偶然のできごとが，他者と共有されることによって，幼児のユーモアの芽生えにつながっていくと考えられる。先に述べた，「無意図的なもの」も，ユーモア表出児にとっては，意識していない行為であったため，「偶然なもの」と同じものとして捉えられると思われる。よって，「無意図的なもの」，「偶然なもの」は，幼児のユーモアの芽生えに非常に重要になってくると考えられる。

### 5．4　共有相手について

ユーモアが成立するには，他者から反応を得ようとしている姿が見られることが必要である。まずは，誰に対して働きかけているかについて分析していく。他者については，不特定多数の他者，保育者，観察者，幼児で見られた。観察当初は，不特定多数の他者に対するものが，多く見られた。これは，ユーモア表出児自身が，おどけたり，おかしな姿を表出したりすることを楽しんでおり，それを誰かに見てもらいたいという思いがあるからだと思われる。いくつか特徴的な事例を挙げ，分析していく。

| 事例1　2013年5月8日（水）〈へびだぞー〉 |
|---|
| B4は縄跳びの片方を持って，ニヤリとしながら「アビ（ヘビ）だじょ～」と縄を地面につけて，ニョロニョロと動かしながら引きずり，背中を曲げて，小走りしていた。<br>それを見た他児も同じように，縄跳びをニョロニョロと動かして歩いていた。<br>（B4と真似をしていた他の幼児との直接的なかかわりはなく，その動きをすること自体を楽しんでいるようだった。） |

B4の行動に対し，模倣した幼児がいたが，B4と模倣した幼児とのかかわりは見られなかったことから，自分自身が周りに働きかけていること自体を，楽しんでいることが大きいと思われた。周りに働きかけたときに，「わーへびだー！」と怖がるふりをする他者がいなくても，その行動を続けていたのは，幼児の中で，その行動が「面白いこと」であるからだと考えられる。

| 事例36　2013年7月18日（木）〈ふみきりを持って踊る〉 |
|---|
| B1はブロックのふみきりを両手に持って，カラカラ鳴らしていた。「おどりでーす！」と笑顔でおどけながら言って，保育室をぐるぐると踊りながら回っていると，G1もふみきりを一つ持って，「タラリタラリタラリラーラー…」と歌いながら，踊っていた。2人でカラカラ鳴らしながら踊っていると，M先生が「それね，カチカチすると，こわれちゃう。」と言ったが，2人は特に反応もせず，そのまま踊り続けていた。<br>また，B1は片手にブロックのふみきりを持ち，「ヘイヘイヘイ！」と言って，踊りだした。すると，G1も「ヘイヘイ　ヘイヘイ」と笑顔で言って踊る。B1は「たいそー」「たいそーぎー」とおどけて踊っ |

ていると，G1も「たいそーぎー」と一緒に言いだして，２人で同じ動きをして踊っていた。そこに，B3が「なにしてるのー？」とやってくるが，中には入ることはできなかった。

B1は，ブロックのふみきりを両手でカラカラと鳴らしたり，「おどりでーす！」と言いながら，保育室内をぐるぐると回っていることから，他者からの反応を得ようとしていると思われる。動きや音が大きかったからか，G1が模倣し，２人で「面白さ」を共有していた。

| 事例80　2013年10月30日（水）〈ヘービヘビヘビ〉 |
|---|
| B３，B４は床に仰向けに寝そべりながら，頭の方向に体を滑らせて，「ヘービヘビヘビヘビ」と笑いながら，保育室を回っていた。それを見た，G1は「B3へびがきたーー！！」とB3を指さしてB1やG4，B6と「わー！」「きゃー！」と笑いながら言っていると，B3はG1たちの盛り上がっている方へ向かって，微笑みながら近づいていった。（このときB4はG1たちの方にいる。）すると，またG1たちは「B3へびだー！！」「きゃー！！」と言って叫び，B３の方へ集まり，仰向けになっているB３を囲みに行った。そこに保育者が様子を見に行くと，G1，B1，G4はままごとコーナーに戻り，B６は「へび！」と言って，仰向けに寝そべり，B３の後を追いかけた。 |

クラス全体で，B3，B4の行動に反応し，イメージを共有していた。B3，B4が「ヘビ」であり，「ヘービヘビヘビヘビ」とおかしく言葉を発することで，面白さが増し，さらにそれをG1が「へびがきたー！！」と大きく反応することで，自然にそこに参加するようになる。ここでの不特定多数というのは，これまでは誰に反応されるかわからないものであったが，ここでは「わー！」と逃げている幼児に対してであり，その中で特定している幼児がいるように考えられなかったことから，不特定多数とした。クラス全体で反応していることから，一人遊びよりも，幼児同士でのかかわりが増えてきたということも考えられる。

これらのことから，不特定多数の他者に対するユーモア行動は，他者からの反応を得ようとはしているが，自分自身が表出していること自体を楽しんでいるものが多い傾向があることが考えられる。そして，他者によって共有されたものは，イメージが膨らみ，他者との相互作用によって，その活動がより活発なものになっている。幼児のユーモアが成立するためには，他者から共有されることが必要であることが考えられる。

次に，特定の他者については，観察者に対するものが一番多く，観察をするにつれて，観察者に対するユーモア表出が増えてきた。これは，参与観察による記録であったため，自分とかかわりのあった幼児の印象が強くなってしまうことが大きいと思われる。また，基本的に幼児の要求に応じているため，反応してもらえるという思いや，観察者と幼児との間に信頼感や安心感を得やすかったのではないか。次の「共有の仕方」についてでも触れるが，私に対しての表出の場合，大きな影響を与えないため，「微笑」や幼児の行動に対しての「問いかけ」「受け止め」くらいに抑えている。そのため，反応後の幼児の大きな変化は見られなかったが，その行為をやめさせるということはしなかったため，のびのびとユーモアを表出できるようにはなっていたと思われる。表出の仕方に関しては，保育者に対しても同様で，「みて！」と声をかけてから行うものが多く，「みて！」と言わなくても，直接働きかけてきたりするものが多かった。

また，幼児に対する表出は，相手に対して指を指したり，体を前に突き出したりするものや，相手に直接触れるものが多く，「みてー！」と声をかけるものもあり，保育者同様，特定の他者に反応を得ようとする場合には，相手に伝わるように合図をすることが見られるようだ。

不特定多数の他者に対するものから，特定の他者に対するものが増えてくるということは，自分がやっている行動を，特定の他者と共有したい思いが強くなっているからであると思われる。しかし，不特定多数の他者に対する表出は，先にも挙げたように，月齢の高い幼児に多く見られる。表２にもあるように，月齢の低い幼児が，ユーモアを表出してくるようになると，そのほとんどは，保育者や観察者，他の幼児に対するもの，つまり特定の他者に向けたものであった。そのことから，特定の他者に向けたものが多くなってきていると考えられた。その特定の他者のほとんどが，保育者に対するものであった場合，その保育者との信頼感・安心感はあるが，保育者によって，その幼児のユーモアが支えられていると考えると，他者とのかかわりが未熟であると思われる。幼児は，一人あそびから，次第に平行あそび，連合あそびと，遊ぶときの人数が増えてくると考えられていることからも，不特定多数の他者に対するものの方が，他者とのかかわりの発達が進んでいると思われる。

### ５．５　共有方法について

共有の仕方には，様々な種類が見られたため，それらについて分析していく。まず，比較的多く見られたものは，「幼児による模倣」である。「模倣」は，不特定多数の他者，特定の幼児に対するユーモア行動の共有の中で多かった。特徴的な事例とともに分析していく。

| 事例32　2013年７月11日（木）〈しんかんしん！〉 |
|---|
| G1が「いまでしょ！」と盛り上がっているのを見て，B１は「しんかんしん！」と足踏みをしながら，ブロックを持って，保育室を歩いている。G1も「しんかんしん！！」と笑いながら言って，足踏みをすると，B８も「しんかんしん！」と弾んだように言い，保育室をぐるぐると回った。G1はB1とのかかわり（同じタイミングで発する，同じ動きをする）が見られたが，B8は一人でぐるぐると歩きまわっていた。 |

B1がナンセンスな言葉を発しながら，足踏みをして保育室を歩き回っている。これは特定の他者からの反応を得ようとしているのではなく，不特定多数の他者に向けて表出しているものであると思われる。それに対して，G1，B8が模倣した。B1の行動を「面白い」と思い，体が自然と動いたのではないかと思われる。ここでのG1とB8の模倣の違いとして，G1はB1とのかかわりがあったため，共有していることも楽しんでいると思われたが，B8はB1とのかかわりは見られなかったことから，その行動自体に「面白さ」を感じているのだと思われた。この時期のB8は一人遊びを盛んに行っており，他者とのかかわりはあまり見られていなかったことも関係していると考えられる。

その他の共有方法は，「問いかけ」，「イメージの共有」などが見られた。それぞれについても事例を挙げて検討する。

「問いかけ」（　　のところが「問いかけ」部分）

| 事例17　2013年６月12日（水）〈お腹ぱんぱん〉 |
|---|
| B6がハンカチを服の中に入れて，パンパンにしていた。それを見たB１も，すぐにハンカチやおんぶ紐などを服の中に入れてパンパンにし，「みてー」と私のところにやってきた。G１に「おっぱい？」と聞かれると，「へへへ」と笑い，「コッシーさんでーす！」と笑いながら言って，ジャンプをした。G1，G2，B4は持っていたブロックを服の中に入れて，見せてきた。私がそれぞれ，「大きくなってる！ポンポン」とすると，満足したのか，他のところへ行った。 |

B1はG1の問いかけに対して，一度「へへへ」と笑っており，その後は，問いかけに関係のない行動をしている。ユーモア表出児が「へへへ」と笑っていることから，問いかけは聞いていると思われるが，それに対する応答が見られないため，コミュニケーション能力は，未熟であるように思われる。しかし，問いかけの前後にユーモア行動が見られるため，他者からの問いかけは，自分のユーモア行動に対する反応の１つに過ぎず，その内容に関わらず，自分のユーモア行動が受け入れられたと考え，それ以降もユーモア行動の表出が見られたと思われる。

「イメージの共有」

| 事例75　2013年10月18日（金）〈おばけだぞー〉 |
|---|
| G3はG4とB6に対して，突然，「おーばーけーだーぞー！」と低い声で言って，手を前に出しておばけのふりをして，笑いながら２人を追いかけようとすると，G４とB６は「きゃー！」と叫んで，笑いながら逃げた。G３は２人を「まてまてー！」と低い声で言って追いかけた。 |

ここでは，G3の行動は笑いを伴っていることから，G4,B6を怖がらせようというよりは，笑わせよう，楽しませようという気持ちの方が強いと思われる。それに対して，G4,B6は，「怖がるふり」をして，逃げることで，G3の行動を共有している。

「問いかけ」や「イメージの共有」は幼児だけでなく，保育者にも見られたが，幼児には見られなかったものとして，「ラベリング」があった。

「ラベリング」

| 事例58　2013年９月24日（火）〈どろぼーだぞー〉 |
|---|
| B6は帽子のゴム紐を鼻の下に当てて，「みてー」と笑いながら私のところへやってきた。私がそれに対して，「ドロボーみたい。」と笑うと，「どぼろーだぞー」とジャングルジムの周りを走りだした。それを見たB4は「やだー」と言って，B６から逃げて，笑いながら追いかけっこをして楽しんでいた。 |

ここでは，私がB6の行動に対して，「ドロボーみたい。」と答えたことによって，B6のイメージが膨らみ，他の幼児とのかかわりが広がった。私は基本的に「微笑」か，幼児の行動に対して「本当だね。」「大きいね。」などと「受け止める」ことしかしていなかったのだが，ここでは，「ラベリング」を無意識にしていた。私がここで，「微笑」だけの反応をしていたら，B6の中から「ドロボー」というイメージは出てくることはなく，ただ，その行動が「面白いもの」

ということで終わっていたと思われる。このことから，共有者の反応はユーモア表出児にとって，大きな影響を与えることが考えられる。

ほとんどの事例の中で見られた，共有方法には，「笑い」が伴っていたのだが，「笑い」のみのものもいくつか見られたので，それについても事例と共に分析していく。

「微笑」

| 事例99　2013年11月21日（木）〈じぇじぇじぇ！〉 |
|---|
| B2はA先生の膝の上に座っている，B7に対して，「じぇ，じぇ，じぇ！」とゆっくり笑いながら言うと，B7はB2を見ながら，微笑んだ。 |

「微笑」は観察者が主に行っていたことであったが，幼児も一度だけ見られた。ここでのB7は，「じぇじぇじぇ！」を認識していたかは分からないが，B2がB7に働きかけていることに反応し，微笑んだと思われる。しかし，幼児での「微笑」がここでしか見られなかったことを考えると，これは特に「面白い」と思ったわけではないが，B2も笑っていたので，親しみを込めた「微笑」とも考えられる。この日のB7は，好きな遊びの時間はずっと保育者の膝の上に座っていたことから，そうすることで安心感を得ており，そこから動きたいと思わなかったのだと思われる。普段のB7の様子から，模倣することが想像できるのだが，その日のB7の気分が相手の行動を模倣するほどではなかったため，「微笑」がその日のB7の最大の共有方法であったということも考えられる。

「笑い」

| 事例60　2013年9月24日（火）〈どろぼーだぞー 2〉 |
|---|
| B6はG4に「みてー。どろぼーだぞー。」と帽子のゴム紐を鼻の下に当てて見せると，G4は声を出して笑った。 |

この事例は，声を出して笑っているものである。共有者はユーモア表出児にとっての特定の他者である。B6の「どろぼーだぞー！」という行動に対して，ほとんどの幼児は「きゃー！」と逃げたり，鼻の下に帽子のゴムを当てて，模倣したりしていた。しかしここでは，B6の行動を見て，ただ笑うだけだった。B6に対する，親しみの「笑い」のようにも見られるが，B6が「面白いこと」をやっていると思い，感情の共有をしたというようにも読み取れる。

5.4で共有相手に観察者が多かったことについて，観察する際に，観察者の反応が幼児に大きな影響を与えないために，普段よりも反応を少し抑えていた。そのため，「微笑」「受け止め」などの反応が多くなった。「ラベリング」について，幼児のイメージが膨らみ，周りの幼児とのかかわりが広がったことからも，共有者の反応は大きく影響すると思われる。幼児のユーモアがどのように受け止められるか，反応されるかによって，表出児のそれ以降のユーモアの使用の仕方も変わってくると思われる。クラスの中で保育者が幼児のユーモアをどのように捉えているかということに焦点を当てることで，ユーモア表出児の反応前と反応後の違いを見ていけるのではないか。これは，今後の課題としたい。

また，先ほども，ほとんどの共有方法に「笑い」が伴っていると述べたが，ユーモア表出児の行動を模倣しているときや，ユーモア表出児とかかわっているときなどの表情は，真剣なものではなく，口元が緩んでいるものが多い。それは，遊びの中での行動であったり，ユーモア表出児も自分が「面白い」と思っていることを，相手と共有したいと思ったりしているからだと思われる。このことからも，ユーモアと「笑い」の関係は深いものであると考えられる。

これまでは，反応があったものについて考察してきたが，反応されないものもあったので，それについても事例と共に分析していく。

「反応なし」

| 事例25　2013年6月26日（水）〈おまつりわっしょい！〉 |
|---|
| B3は持っていたカバンを背中にかけ，もう片方で持っていたブロックを上下に振りながら，「おまつりだ！わっしょい！わっしょい！おまつりだ！」と大きな声で言い，笑いながら，保育室を歩き始めた。それを見た，B4が一度席から立つが，真似はしなかった。 |

| 事例71　2013年10月11日（金）〈テレッテッテッテッテッテッテ〉 |
|---|
| B1は先生の前で，「テレッテッテッテッテッテッテ，B1ちゃん！」と笑顔で歌いながら，そのリズムに合わせて，腕を交互に上げ下げし，お尻を振って，膝を曲げて，体を上げ下げして踊っていた。近くにいた先生は他の幼児に対応しながら，その行動を見ていたが，特に笑ったり，声をかけたりといった反応は見られなかった。それでもB1は近くを，にこにこしながら，その動きのまま，歩きまわっていたが，特に他児からも反応はされなかった。 |

ここでは，事例25が不特定多数の他者に対するも

のであると思われる。一方で，事例71は特定の他者に働きかけているが，特に反応がなかったものである。不特定多数の他者に対するものは，特に反応がなかったので，一人遊びのようになっている。「おかしな言葉」を発しているが，周りの他児は特に反応が見られなかった。動きも伴っていたからか，一度興味を示した幼児はいたが，模倣までには至らなかった。これは，他の幼児は自分の遊びに集中していたり，特に興味を感じなかったりしたからだと思われる。

一方で，特定の他者に働きかけているものについて，事例71は大きくおどけた動きをしており，さらに，おかしな言葉も発しているが，保育者はただ見るだけであった。これは，他の幼児の方に意識があったからであると思われる。保育者に見せた後，保育室を歩き回っていたことから，他の幼児にも表出していたと思われるが，そこでも反応がなかった。このB1の行動は，他の幼児に共有されやすいものであると思われるが，あまりにも文脈からかけ離れており，突然過ぎたため，B1の行動の意味を理解できなかったり，B1の行動自体を特に「面白い」と感じなかったりしたのだと思われる。

これらのことから，反応がなかったものの大半は，他の幼児や特定の他者に届いていないものであった。ユーモアを表出している幼児自体が，本当に反応を得ようとしていれば，気づかれるまで行動を繰り返すと思われるが，そうではなかったことから，自分の中で楽しいと感じている思いの方が強いのではないかと思われる。また，特定の幼児に表出しており，気づいてはいるが，反応されなかったものについては，文脈からかけ離れ過ぎていたり，経験の有無などの要因から，その特定の幼児が，表出児の行動や，その「面白さ」を理解できなかったことが考えられる。このことから，この時点でのユーモア行動の表出は，自分が「面白い」と感じているものを相手に共有したいという思いが強く，それが必ずしも相手も「面白い」と感じるだろうということまでは考えていないのではないかと思われる。このような経験を重ねることで，幼児のユーモアが形成されていくのだろう。

## 6．考察

これまでの考察より，ユーモアとはどのようなものであるのかをまとめる。

1．ユーモアの特徴として，「不一致」，「見立て」，「おかしく言葉を発する」，「おどけた恰好をする」，「おかしく言葉を発し，さらにおどけた恰好が伴っているもの」，「排泄や性に関すること」，「テレビや成人の真似」，「言葉のもじり」，「反対言葉」，「相手に触れる」，「相手をおどかす」が挙げられた。それぞれについて，どのような側面をもっているかまとめていく。まず，「不一致」，「見立て」，「言葉のもじり」，「反対言葉」について，「不一致」は現実と違うことを認識して表出される行為，「見立て」はあるものを他の何かに見立てるという行為，「言葉のもじり」は異なる言葉同士を組み合わせたり，少し言葉を変えたりする行為，「反対言葉」は１つの言葉を対にする行為であることから，知的な発達が伴う必要があり，認知的側面であると思われる。次に，「おかしく言葉を発する」，「おどけた恰好をする」，「おかしく言葉を発し，さらにおどけた恰好が伴っているもの」は，リズミカルな言葉を発したり，思いのままに体を動かしたりして，「面白さ」を感じる行為であることから，情動的側面であると思われる。また「排泄や性に関すること」は一般的にタブーとされていることなので，社会的ルールである。そして，「相手に触れる」，「相手をおどかす」については，直接他者に働きかけているという点で，他のものと少し違うが，直接働きかけた他者を笑わせようとしている行動であることから，認知的側面であると考えられ，またそのための行動に声に抑揚をつけて発したり，おかしな動きをしたりと，「おどけ」の姿も見られ，他者と「面白さ」を共有しようとしていることから，情動的側面も含まれていると思われる。「テレビや成人の真似」については，幼児が日常生活の中でどのような経験をし，それらをどのように捉えているかということが表出されることから，環境や文化との関連があると思われるが，ここについては今後検討する必要がある。これらのことから，ユーモア行動は，認知的側面だけでなく，情動的側面，社会的ルールなど，あらゆる側面を含んでいることが考えられる。

2．幼児間の違いにみる，ユーモアの特徴としては，月齢の高い幼児の方がユーモア表出数や共有数が多い傾向があるが，月齢の低い幼児でもユーモア表出数や共有数が多く，月齢が高い幼児でも表出数や共有数が少ないことも見られた。このことから，一概に月齢の高さによってユーモア表出数が高いとは言えず，それ以外にも要因があると思われる。その要因を捉える要素の１つとして，ユーモアが誰に向けられたものなのかということが挙げられる。ユーモア表出数の多い幼児のほとんどは，不特定多数の他者，特定の保育者，幼児など様々な相手を対象にしている。しかし，ユーモア表出数の少ない幼児のほとんどは，特定の他者に

向けられたものが多い。これは，その特定の他者との間に信頼や安心を感じているということも考えられるが，その他者によって，幼児自身が支えられていることも大きいことからも，他者とのかかわりに未熟さがあるのではないかと考えられる。その他にも，個人の性格の違いも挙げられるが，ユーモア表出数は，どのような他者と，どのようにかかわっているかという，他者との関係性も関連していると思われる。

3．幼児のユーモアには，特に意識をして行動をしていたわけではないが，他者によって「面白い」と思われ，反応されたことによって，それ以降，意識をして行動を繰り返すものと，偶然起こったことに「面白さ」を感じ，それを繰り返すものとあった。前者を「無意図的なもの」，後者を「偶然なもの」として検討したところ，「無意図的なもの」は，他者に反応されたことをきっかけに成立し，「偶然なもの」は，自分と相手とで「面白さ」を共有することで成立すると考えられた。もちろん，「無意図的なもの」も他者との「面白さ」の共有が必要である。阿部（1999）[12] は，偶然をくり返して，笑い合うことの快さや楽しさを経験していくと，子どもたちは今度はその笑いを自分たちでつくりだそうとすると述べている。つまり，そのような経験を繰り返すことで，幼児が意識をしてユーモア行動を表出するようになるのではないかと思われる。これらのことから，「無意図的なもの」，「偶然なもの」は，幼児のユーモアの芽生えにとって非常に重要なものであると考えられる。

4．共有相手について，観察当初は「不特定多数の他者」に対するものが多く，次第に，「特定の他者」に対するものが増えた。しかし，幼児一人一人で捉えていくと，月齢の低い幼児が次第にユーモアを表出するようになり，そのほとんどが「特定の他者」に向けたものであったことから，全体としての「特定の他者」に対する割合が増えたと考えられる。また，不特定多数の他者に対するものは，月齢の高い幼児の方が多いことからも，他者とのかかわりの発達の違いが見られた。

5．共有方法について，幼児の中で最も多く見られたものは「模倣」であり，その他には，「問いかけ」，「イメージの共有」があった。また，保育者にしか見られなかったものとしては，「ラベリング」が見られた。全体として，ほとんどの共有方法には，「笑い」が伴っていたことから，ユーモアと「笑い」の関連が深いことが考えられる。

そして，「反応なし」だったものについては，多くはユーモア表出児の行動が，他の幼児や特定の他者に届いていなかったものであると考えられた。相手に気づいてもらえるまで，反応があるまで繰り返すことがないということは，他者と共有したいという思いよりも，自分自身がその行動をしていることが楽しいという思いの方が強いからであると思われる。また，特定の他者が気づいてはいるが反応されなかったものは，その幼児が表出児の行動やその「面白さ」を理解できなかったことも考えられた。個人差によるものも関係すると思うが，ユーモア表出児は，自分が「面白い」と思っていることを他者と共有したいという思いが強く，それが他者にとって「面白い」かどうかは，この時点では常に考えられているわけではないと思われる。つまり，この時期はユーモアの芽生えの時期であり，他者と「面白い」ことの共有を繰り返していくことで，他者が「面白い」と思うことも理解するようになると考えられる。

以上より，ユーモアの特徴としては，以下のように考えられた。

- 認知的側面だけでなく，情動的側面，社会的ルールなどの発達を基盤として芽生えてくる。
- 月齢の高い幼児の方がユーモア表出数が高い傾向があるが，他者とのかかわりに未熟さが見られる幼児は，ユーモア表出数が少なかったり，特定の他者に対する表出が多くなったりする傾向がある。
- 「笑い」との関連が深い。
- ユーモアを表出している幼児は，自分が「面白い」と思っていることを，他者と共有したいと思って表出している。

また，ユーモアの芽生えとしての特徴は，以下のように考えられた。

- 「無意図的なもの」，「偶然なもの」の繰り返しによって，ユーモア表出が増えてくる。
- 自分が「面白い」と思うことを他者と共有しようとし，必ずしも，他者が「面白い」と思うことを理解しているわけではない。

つまり，他者とのかかわりが増えてくることによって，他者が「面白い」と思うことを理解するようになり，他者から反応されることを目的とした，ユーモア表出がされるようになると思われる。

## 7．今後の課題

今回の研究では，ユーモア表出児の共有対象者が観察者であることが多かったが，観察者が幼児に刺激を与え過ぎないためにも，「微笑」，「問いかけ」，「受け

止め」など控えめな共有方法をとった。幼児の行動を基本的には受け止めていたので，ユーモア行動を表出することに影響を与えないと思われたが，一度「ラベリング」をしたときに，その幼児のイメージが膨らみ，他者とのかかわりへと発展したことから，保育者の幼児へのかかわりが非常に大切であると考えられる。保育者が幼児の行動をどのように受け止めているのか，それによって幼児がどのように変わっていくのかということは，学級の雰囲気づくりにも大きな影響を与えると思われる。ユーモアの芽生えの段階で，保育者や観察者へのユーモア表出が多いことは，その対象に安心感や信頼感を抱いているからであろう。このことから，幼児がユーモアを表出するには，安心感や信頼感を抱いていることが必要であり，そのような空気感のある学級では，幼児のユーモアが受け止められやすく，表出されやすいのではないかと考えられる。そしてその空気感を作るのは，保育者であると思われるため，今後の課題として，保育者が幼児のユーモアをどのように支えており，それによって幼児がどのように変化していくのか，学級の雰囲気にどのような影響を与えるのかについて検討していきたい。

また，今回は，好きな遊びの時間に焦点を当てたが，観察時間の中には，「おやつ場面」も含まれていた。このときは，幼児がテーブルにつき，おやつを食べるのだが，そこでもいくつかユーモア行動と思われるものが見られた。このことから，「おやつ場面」や「食事場面」のように，幼児が１つの場所に集まり，顔を見合わせているようなところでは，幼児同士のかかわりが増え，ユーモア行動も増えるのではないかと思われた。「おやつ場面」，「食事場面」におどけること，ふざけることは，「行儀が悪い＝タブー」と捉えられるため，保育者からは受け止められにくいが，幼児同士では，「タブー」に触れることに「面白さ」を感じ，共有する姿が多く見られるのではないかと思われる。「おやつ場面」，「食事場面」での幼児同士のユーモア行動についても研究する意義があるだろう。

さらに，幼児のユーモア行動の中で，「テレビや成人の真似」をしているものもいくつか見られたことについて，幼児のユーモア行動は，環境や文化との関連があるのではないかと述べた。日本と外国との文化の違いもあるように，幼児を取り巻く環境によっても，ユーモアの違いが見られると考えられる。実際に，ユーモア表出が多かった幼児には兄や姉がいたり，日頃から大人とかかわることが多かったりする幼児であった。そこで，ユーモアの文化の伝承という観点から，ユーモアの文化史とのつながりも深いのではないかと思われる。

## ８．引用文献


1） 上野行良：ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について　社会心理学研究　7　112-120　1992

2） 上野行良：ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係　心理学研究　64　247-254　1993

3） McGhee,P.E.: *HUMOR, Its Origin and Development* San Francisco, W.H. Freeman and Company 1979
なお著者は原著未読。本稿では，島津一夫訳：子どものユーモア―その起源と発達―誠信書房　1999を参照した。

4） 平井信義：ユーモアの発達（第１報）―幼児期におけるおどけ・ふざけの意義について―　大妻女子大学家政学部紀要　第21号41-52　1985

5） 奥田倫子：子供のユーモアに関する研究（その１）北陸学院短期大学紀要　第19号　83-96　1987

6） 奥田倫子：子供のユーモアに関する研究（その２）北陸学院短期大学紀要　第20号　25-48　1988

7） 田爪宏二：自由遊び場面における幼児のユーモア発言　幼年教育研究年報　第18巻　95-100　1996

8） Freud,S.: *Jokes and their relation to the unconscious.* New York:Norton. 1960
なお筆者は原著未読。本稿では，O.N.サラチョ，B.スポデック編著　白川蓉子・山根耕平・北野幸子共訳　乳幼児教育における遊び―研究動向と実践への提言―　培風館　59-72　2008を参照した。

9） 友定啓子：乳幼児における笑いの発達―1歳児から２歳児へ―　日本家政学会誌　Vol.43　No.8　735 ～ 743　1992

10） O.N.サラチョ, B.スポデック編著　白川蓉子・山根耕平・北野幸子共訳：乳幼児教育における遊び―研究動向と実践への提言―　培風館　59-72　2008

11） 宇惠　弘：ユーモア測定尺度の作成　関西福祉科学大学紀要11号　31-40　2007

12） 阿部和子：子どもの心の育ち　０歳から３歳　自己がかたちづくられるまで　萌文書林　1999


## 謝辞

本研究の実施にあたりまして，ご協力いただきました国分寺市立もとまち保育園の園児の皆さん，先生方に，心より感謝いたします。

# 2歳児のユーモア行動の表出と共有過程

# Expression of the Humor Actions and Shared Process of the 2 years old Child

栗　林　万　葉*・岩　立　京　子**

Mayo KURIBAYASHI and Kyoko IWATATE

幼児教育学分野

**Abstract**

The actions transcribed in a word “humor “are various. In Japan, it has been studied in the keywords such as “odoke (buffoonery) “ and “fuzake (funny business)”, but it is hardly studied in 2 years old children.

In this study, it is intended to clarify the developmental change of humor actions and the process children share the humor by the observation of 2 years old children in the nursery school. We developed the original category of humor from the studies of Okuda (1988) and Tazume (1996) and categorized the humor actions of 2 year old children.

The results shows the characteristic of the following humor action: ①the humor action of young children emerge from not only cognitive but also socio-emotional development and the cognition of social rules, ②the older the lunar age is, the more the number of humor actions are, ③humor deeply relates with “laughing”, ④young children express humor to share much fun with other children. In addition, it was considered as characteristics of the emergence of the humor as follows. They are ① the humor increase through the repetition of the experience of the fun and pleasure by unintentional and incidental behavior , and ② young children wants to share what they find fun, but they necessary don’t understand what the others find fun and pleasure. It is thought that humor comes to be expressed coming to understand that others are interesting, and young children express humor to get a reaction from others by the relations with others increasing.

Keywords: humor, 2 years old children, development change, shared process, observation

*Department of Early Childhood Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 「ユーモア」という語で表記される行動は多様である。日本では「おどけ」「ふざけ」などのキーワードで研究されているが，２歳代ではほとんど研究されていない。本研究では，保育所における２歳児クラスの子どもたちを観察することによって，その発達的変化，及びそれらが共有されていく過程を明らかにすること

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
** Tokyo Gakugei University（4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan）

を目的とする。また，幼児の行動をユーモアであると判断する基準として，奥田（1988），田爪（1996）の研究を参考に，独自の幼児のユーモアカテゴリーを作成し，２歳児のユーモア行動を分類した。　結果は，ユーモア行動について次のような特徴を示した：それらは，①認知的側面だけでなく，情動的側面，社会的ルールなどの発達を基盤としてユーモアは芽生えてくること，②月齢の高い幼児の方がユーモア表出数が高い傾向があること，③ユーモアは「笑い」との関連が深いこと，④幼児は，他者と面白さを共有するためにユーモアを表出していることである。また，ユーモアの芽生えの特徴として次のように考えられた。それらは，①「無意図的なもの」,「偶然なもの」の繰り返しによって，楽しさやおもしろさを繰り返し経験することにより，ユーモア表出が増えてくること，②幼児は，自分が「面白い」と思うことを他者と共有しようとするが，必ずしも，他者が「面白い」と思うことを理解しているわけではないことである。つまり，他者とのかかわりが増えることによって，他者が「面白い」と思うことを理解するようになり，他者から反応を得るためにユーモアが表出されるようになると思われる。

キーワード: ユーモア，２歳児，発達的変化，共有過程，観察